

日報 歴史講座

# 関ヶ原の戦いから

# 十数年後の出来事



夫の死後、お初は剃髪して出家。名を常高院と改めました。

茶々の妹  
初 (常高院)

## 和議の交渉に板挟みになるも。

### 豊臣側の使者として仲介に奔走 徳川勢と交渉して和睦に尽力

大坂冬の陣・夏の陣  
において、常高院は姉の淀殿・秀頼母子を救わんと、徳川家に嫁いだ妹・お江の方の義父に当たる家康の命で大坂城へ乗り込んで和議の交渉にあたるも、その努力もむなしく戦火は上がり、幼い時から苦楽を共にした姉や甥の秀頼を失ってしまいました。お初の方が、ねんごろに労をねぎらってくれる姉・淀殿に最後の別れを告げて大坂城を去ったのは、1605年四月七日、大坂城落城は翌八日でした。

大坂冬の陣・夏の陣  
において、常高院は姉の淀殿・秀頼母子を救わんと、徳川家に嫁いだ妹・お江の方の義父に当たる家康の命で大坂城へ乗り込んで和議の交渉にあたるも、その努力もむなしく戦火は上がり、幼い時から苦楽を共にした姉や甥の秀頼を失ってしまいました。お初の方が、ねんごろに労をねぎらってくれる姉・淀殿に最後の別れを告げて大坂城を去ったのは、1605年四月七日、大坂城落城は翌八日でした。

晩年、江戸に滞在していた常高院は、自らの心の拠りどころとして、また、夫高次の菩提を弔い、さらには父母である浅井長政とお市の方らの供養の為、寛永七年嫡男である忠高（実母は於崎（玉台院）、正室は徳川家第2代将軍秀忠・お江の方の四女・お初）が領主一万石の時、

一方、夫である京極高次は室町期における近江の守護大名であった佐々木京極家の嫡男として生まれた（一五六三年）が、幼少時は辛酸を嘗めました。既に京極家は家臣であった浅井家に大名の地位を奪われており、高次は信長のもとに人質として送られたのだった。名門京極家再興を期待されて成長した高次は、秀吉配下の部将として活躍し、秀吉のあつせんでお初の方を正室として迎えたのは、近江大溝城

その後、日本を二分する関ヶ原の合戦が起こる。秀吉の取り計らいでお初の方と結婚したが、妹お江の方の嫁いだ徳川家から矢継ぎ早に来る度重なる出陣依頼を断り切れず、今度は徳川方に加担。お初の方の姉の豊臣家と妹の徳川家の板挟みとなって苦しんだのです。しかし、天下はすでに徳川家に傾きつつあり、関ヶ原の戦いの功あつて若狭八万五千石の領主として小浜に入府。小浜における業績としては、それまでの後瀬山城を廃し、雲浜に新たに小浜城の築城に着手したこと、又、現在に至る小浜の町割りを行ったことなどがあげられる。しかし、病を発し、小浜城の完成を見ることなく慶長十四年（一六〇九年）四十七歳で没した。

